

先日、あるレストランのご主人からこの様な話をうかがいました。

「最近の家族連れのお客さんは、せっかく食事にきたのに話もせず、それぞれスマートフォンやゲームをして、楽しそうに見えない。このままでは家族で外食を楽しむということが無くなってしまわないか」と心配されている様子でした。

夏を迎えるとお盆の季節、ご先祖様の面影^{おもかげ よみがえ}が蘇^{あつ}ってまいります。

日頃からお仏壇に手を合わせ、お墓参りを欠かせない信仰心の篤い方であっても、ご先祖様をお迎えするとなると、先ずは心の居住まいを正し、その日その日の仏教徒としての行いはきちんとしているだろうか、と自らの心の内を振り返ります。

この心の働きは、お盆を迎えるにあたり大切なものとされています。

お盆のいわれは、一説ではインドにおける僧侶の集中修行期間の最後の日である七月十五日に、修行僧同士が「身」と「口」と「心」とによって犯した過^{あやま}ちを互いに告白しあい、反省をする日とされています。もともとは、仏教徒が自分自身を振り返る日であったのです。

そして、その七月十五日に、両親を中心とした亡くなったご先祖様のために、ご飯などのさまざまな食べ物、果物や木の実・草の実、水を入れるたらい、体に塗る香油^{こうゆ}、ともしび、横になる敷物、さらに可能な限りの御馳走を修行僧への供養の席にお供えするといわれています。両親が健在であれば、お父さんとお母さんに対しても同じように供養をし、その功德によって苦しみを離れるとお盆のいわれを説いたお経に説かれているのです。

お盆といいますと、とにかく先祖供養に限った行事ととらえがちですが、僧侶がお経をお唱えし、仏様、ご先祖様、ご家族やご親戚、縁の深い多くの方々が揃^{そろ}って御馳走を囲み、故人の思い出を語り、それぞれの近況を報告し合い、仏教徒としての道を確認め合う、大切な出会いの場でもあるのです。

この機会に、ご家族と一緒に食事を囲み、顔を合わせて語り合うことの有難^{ありがた}さや深いご縁に思いを廻^{めぐ}らしてみましよう。ひと時、スマートフォンをおいてみてはいかがでしょうか？ あなたの目の前には仏様がいらっしゃるかも知れません。